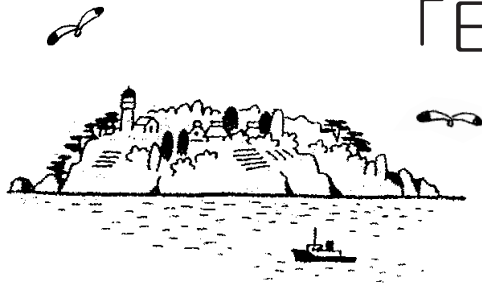


図書室月報

2023年(令和5年)2月5日

第717号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



「日本の島をめぐる旅

—知られざる日本の離島の風景—

に参加して

高瀬 健男

7年ほど前、当時住んでいた川崎市多摩区の図書館で『秘島図鑑』という本を借りた。大学生だった末子の卒業と私の定年があと数年という時期だった。第二の人生への期待というか、今までやりたくてやって来なかった事の一つに離島訪問があった。まして人が住まない様な秘島には心惹かれた。まさにそこにドンピシャの本だった。「うわっ、この人は椎名誠さんを超えている！」著者のあとがきにも書かれているが「実際に漁船を借りて上陸できた島はごくわずか。それでもクルーズ船や定期航路から秘島を遠望したり、最寄の有人島まで……(略)」とまさに絶海の孤島かつ住民が居ない31もの島の話とほぼ全島に渡る写真に心ときめかされた。(例を挙げるだけでも、沖ノ島、南鳥島、婿島、横当島、南波照間島……等)さて、今回はそんな著者の講座が公民館主催で開催(9月4日)とのことで喜び勇んで参加した。前述の『楽園図鑑(2022)』と引き続き、日本の絶景の無人島だけではなく、はかなげ(人口が少ない)で希少性のある小さな島と言った著書が発行されており、今回の講座では副題の「知られざる日本の離島の風景」を写真を交えて生き生きとした語りでお伺いする事が出来た。講座内容としては、①日本の島の概要へ島に関するデータ、②昨今の離島訪問からの離島に残る風習や人との繋がりのお話を頂いた。

①として、日本には6852島(周囲0.1km以上)があり、うち有人島は約418島前後、かつ、その総人口は1955年以降激減、現在110万人(日本全体の1%未満)、1で随分鳴らした様であります(平均28%)という。島の無人化も進み、戦後138島が無人化したとのこと。

②としては、渡名喜島(沖繩本島と久米島の間)での小中学校の先生の離任式や、もはや住民1名の黒島(長崎福江島の下)、新島(東京)の118基もの江戸時代前後からの流人墓地を今も島民が管理されているお話を伺った。

それにも増して、興味深かったのが多良間島(石垣島と宮古島の間)に今でも残る「守姉(もりあね)ムレネエ」の風習、これは6から15歳の島の女の子が他家の子ども(生後1ヶ月から3歳ほど)をまさに実姉の様に子守り子育てする

「清水さん、6852島ある日本に次に行く島は？」

清水浩史著『不思議な島旅』(朝日新聞出版)、『秘島図鑑』『海駅図鑑』『幻島図鑑』『楽園図鑑』(いずれも河出書房新社)、『深夜航路』(草思社)ほか

ブッククラブから

福永武彦 著

『草の花』を読んで—ある青春の愛と孤独と別離

関美智子



2022年の秋の七草が咲く頃、私は『草の花』を手にし、読みはじめたが、この小説には死臭がたちこめており、読了するまで、かなりの日数を要した。

一. この小説の構成と内容

この小説にはペテロの前書、〈人はみな草のごとく、その栄光はみな草の如し。〉第一章二四が置かれ、目次は主人公汐見茂思の二つの手帳をあいだに挿んで、汐見の友人の私の小説「冬」を前に「春」を後にして、音楽的な、ソナタ形式で構成されている。

この小説は友人である「私」の語りで五年前の回想シーンから始まる。五年前、私は東京郊外のK村のサナトリウムに来て、最初の冬に胸廓成形手術を受け、予後が好ましくなく、やっと散歩の出来る身体になって、汐見茂思と一緒に百日紅の木を見たのは、汐見が手術前の身体の時であった。汐見は同室の患者が反対するにもかかわらず、医学のために役立ててほしいと肺葉摘出術を志願し、手術は施行され、結果は術中死。私は生前汐見に託された二冊の手帳を霊安室で読んだ。一冊目には一高時代の弓術部合宿—可能の限り愛した十八歳の春であった。ここで先輩から弓術の技術を学び悩み事の相談や煙草も覚えた。一歳下の藤木忍を愛したが、拒絶され、挫折。二冊目の手帳は藤木忍の妹、千枝子との恋。音楽会や千枝子の家で二人は逢瀬を重ね、愛を育んだが、宗教と

の関係もあり、汐見は一步を踏み出せなかった。そして汐見はいつ召集令状が来るかと戦争を懼れていた。千枝子と別離した後、汐見に召集令状が来て、汐見は千枝子に最後の別れにと音楽会の切符を千枝子に送ったが、千枝子の姿はなかった。汐見は音楽会の後、東京駅に向かった。そこには一高生の友人、立花が見送りに来て、「とにかく死なないようにしろよ。」と手を握った。この第二の手帳は汐見二十四歳、千枝子二〇歳の秋のことが書かれている。

「春」は石井千枝子から、私に届いた手紙の内容である。千枝子は一女の母になっていた。千枝子は汐見の死に驚いたが、今の生活を大事にしたいので、その手帳はあなたさまが預かってほしいと丁寧に断り、汐見の死を知らせてくれたことに礼を述べ、小説は完。

二. ここに福永武彦の詩『ある青春』の中の詩を紹介し、小説と詩を併せ味わってほしい。

《続・ひそかなるひとへのおもひ》最終連

だるまの山にはやはり風がたち
戸田の海には夜光虫がきらめいても
死んだひとは帰らない もう帰らない
そして青春も 希望も かなしいのちも
みんないつの間にかいってしまった

三. 福永武彦の文学とは、

(一) 彼の文学は死と切り離すことができない。彼の小説の骨格は、人間のなかに深く根をおろしている死の意識を軸にして組み立てられていて、登場人物は、やがて訪れる自分自身の死の予感に怯えたりしながら、日々死の重荷を担って生きている姿を若者の視線で捉えている。著者は日中戦争が始まった時は十九歳。この小説にも見てとれるように召集令状がいつくるのかとおびえ、戦場で死ぬことも予想せずにはいられない心理状態を描いている。

(二) 著者の作品には、少年と大人を、生者と死者を、健康な人と病弱な人を、光と闇を、昼と夜を、意識と無意識を、対称してみせる優しさやしなやかさの作品の中に強靱の精神の一途さが潜んでいる。

四. 読後感

この作品を読了後、はるか彼方の我が青春に思いを馳せたが、主人公のように愛を深く追求もせず、無意識に過ごしてきてしまった。主人公は二つの愛に挫折はしたが、彼の発する言葉に成長を感じとった。若者に是非読んでほしい一作品である。

余談であるが、シヨパンも肺結核で三十九歳で亡くなっている。
(新潮社)

新着図書から

〈総記〉

開う図書館

豊田恭子(筑摩書房)

010

〈哲学 心理学 宗教〉

性暴力被害の心理支援

齋藤梓(金剛出版)

146

かなしみとともに生きる

本郷由美子(主婦の友社)

146

〈歴史〉

歴史とは何か

E.H・カー(岩波書店)

201

語られざる占領下日本

小宮京(NHK出版)

210

図書館の日本文化史

高山正也(筑摩書房)

210

昭和史研究の最前線

筒井清忠(朝日新聞出版)

210

天路の旅人

沢木耕太郎(新潮社)

289

東京カフェ日和

オフィス・クリオ(メイツユニバーサルコンテンツ)

291

〈社会科学〉

カリブ海の黒い神々

越川芳明(作品社)

302

分断の克服1989-1990

板橋拓己(中央公論新社)

319

非戦の安全保障論

柳澤協二(集英社)

319

孤独と居場所の社会学

阿比留久美(大和書房)

361

男性中心企業の終焉

浜田敬子(文藝春秋)

366

ヤングケアラーってどういうこと?

ジョー・オルドリッジ(生活書院)

369

ジョン・デューイ

上野正道(岩波書店)

371

生き物をうさがみそーれー

盛口満(八坂書房)

383

〈自然科学〉

につぼんのススメ

小宮輝之・監修(カンゼン)

488

歴史を読み解く城歩き

千田嘉博(朝日新聞出版)

521

捨てない未来

枝元なほみ(朝日新聞出版)

596

〈産業〉

世界で最初に飢えるのは日本

鈴木宣弘(講談社)

611

高橋源一郎の飛ぶ教室

高橋源一郎(岩波書店)

699

〈芸術〉

現代アート、超入門!

藤田令伊(集英社)

702

シヨパン・コンクール見聞録

青柳いづみこ(集英社)

763

教養としての能楽史

中村雅之(筑摩書房)

773

〈言語〉

書く力

鷲巢力(集英社)

816

〈文学〉

カズオ・イシグロを読む

三村尚央(水声社)

910

六人の嘘つきな大学生

浅倉秋成(KADOKAWA)

91あ

此の世の果ての殺人

荒木あかね(講談社)

91あ

まあたらしい一日

いしいしんじ(BL出版)

91い

裸で泳ぐ

伊藤詩織(岩波書店)

91い

熱風至る 1・2

井上ひさし(幻戯書房)

91い

老害の人

内館牧子(講談社)

91う

レペゼン母

宇野碧(講談社)

91う

掏えば手には

瀬尾まいこ(講談社)

91せ

特殊清掃人

中山七里(朝日新聞出版)

91な

鉄道小説

乗代雄介(交通新聞社)

91の

老人ホテル

原田ひ香(光文社)

91は

財布は踊る

原田ひ香(新潮社)

91は

湊かなえのことば結び

湊かなえ(角川春樹事務所)

91み

無人島のふたり

山本文緒(新潮社)

91や

#真相をお話しします

結城真一郎(新潮社)

91ゆ

東京彰義伝

吉森大祐(講談社)

91よ

栗と嘘の季節

米澤穂信(集英社)

91よ

嫌いなら呼ぶなよ

綿矢りさ(河出書房新社)

91わ

森の来訪者たち

ニーナ・バートン(草思社)

94バ

近現代史講座

ウクライナ・ロシア関係の現代史

講師 鶴見太郎(東京大学)

第1回 2月19日(日) 昼2時~4時 「ウクライナとロシアをめぐる歴史と歴史観」

第2回 2月26日(日) 昼2時~4時 「ウクライナとロシアの政治社会構造」



講座参考図書



- *ウクライナ現代史—独立後30年とロシア侵攻 アレクサンドラ・グージョン(河出書房新社)
- *ウクライナ戦争 小泉悠(筑摩書房)
- *ロシアとシリア—ウクライナ侵攻の論理 青山弘之(岩波書店)
- *国際報道を問いなお—ウクライナ戦争とメディアの使命 杉田弘毅(筑摩書房)
- *社会人のための現代ロシア講義 塩川伸明編(東京大学出版会)
- *ウクライナを知るための65章 服部倫卓編著(明石書店)
- *ロシアの歴史を知るための50章 下斗米伸夫編著(明石書店)
- *中学生から知りたいウクライナのこと 小山哲(ミシマ社)

図書室のついで

持続可能な社会をつくる

「適正技術」とは

お話 田中直なお(適正技術フォーラム共同代表、理学博士)

近年、際限のない利潤の増大／経済成長を求め続ける経済と、効率や速度、規模等を追い続ける近代科学技術を両輪として発展してきた近代産業社会の行き詰まりが、様々な立場から指摘されています。課題の解決を目指し、多方面から注目されるSDGs(持続可能な開発目標)においても、その達成のためにどのような社会・経済システムや技術体系が求められるのか、明らかにされていません。今回お招きする田中さんは、自らの企業やアジアでの現場経験を踏まえ、近代科学技術に代わる技術体系としての「適正技術」の在り方を探求した著書をまとめられました。近代の抱える矛盾に具体的な実践を通じて向き合っただけでなく、これからの技術のあり方、さらには持続可能な未来社会の全体像を展望します。

〈田中さんの本〉『適正技術と代替社会—インドネシアでの実践から』(岩波新書)、『現代適正技術論序説—近代科学技術に代わる技術体系をめぐって』(社会評論社) ほか。

とき 2月22日(水)夜7時〜9時

ところ 公民館 講座室

定員 24名(申込先着順)

申込 2月8日(水)朝9時〜

公民館 ☎5725141



〈私の本棚から 第5回〉

瀬尾まこと著

『図書館の神様』



吉沢いより

主人公は元バレーボール部で、バレーボールに自分の時間を全て費やし、図書館に關係ないように見えます。しかし、あるきっかけで、バレーボールと距離を置くようになってしまいました。もともと体育大学を目指していましたが、私立大学の文学部に進学します。

しばらくバレーボールと距離を置いていましたが、十年以上やり続けたバレーボールを簡単に断ち切れるわけもなく、もう一度やりたくなっていました。しかし、いざやろうとすると怖くなってしまいます。部活の顧問でなら関わることが出来るのではないかとという提案によって、大学三回生のときにあわてて教員免許をとりまします。無事、高校の講師になることはできましたが全てがうまく行っただけではありません。バレーボールのコーチになることができなかったのです。文芸部の顧問を任されてしまいました。バレーボール一筋だった彼女は、文芸部の活動がどんなものかを想像できません

でした。たった一人の文芸部員である垣内くんにそのことを伝えると、活動をすすめてくれます。そうして始まった文芸部の活動ですが、バレーボールのように明確な目標があるわけでもなく、活気もない活動に意味を感じられませんでした。

退屈だと感じていた文芸部の活動でしたが、だんだんと文芸部の活動に積極的になっていきます。なんと、朝練まで始めてしまうのです。そして、最後の活動はまさに青春の1ページにふさわしいものでした。

初めてこの作者の小説を読みましたが、他の作品も読んでみたくなりました。退屈だと思っている今も自分の行動次第で、面白くなるのではないかと感じられます。ぜひ読んでみてください。

(マガジンハウス)

係から



図書室の蔵書点検に伴う休室にご理解・ご協力をいただきありがとうございます。近現代史や環境、憲法など2月以降も様々な講座を予定しております。講座の前後にぜひ図書室で関連図書などを手に取ってみてください。